

クライアントが「改善が見られない」と報告した
事例における問題の見方に関する検討

青木みのり*

Perceptions of the Problems of a Client Who Did Not Report Any
Improvement after Undergoing Psychotherapy: A Case Study

Minori AOKI*

クライアントが「改善が見られない」と報告した 事例における問題の見方に関する検討

青木みのり*

Perceptions of the Problems of a Client Who Did Not Report Any Improvement after Undergoing Psychotherapy: A Case Study

Minori AOKI*

This study aims to clarify some features of the perceptions of the problems of a client who did not report any improvement after undergoing psychotherapy; further, considering these features, the study determines how useful psychotherapy should be. For investigating how changes occur in clients' perceptions of their problems through psychotherapy, three consecutive trial-therapy sessions based on a solution-focused approach, and pre- and post-PAC (personal attitude construct) analyses were conducted. A participant discontinued psychotherapy after the second session, because she did not sense any improvement. It was observed that she was obsessed with her problems before the sessions. However, her conflict was alleviated after the second session, though some undesirability existed. The pre- and post-PAC analysis might have influenced these changes. The findings indicated that it is paramount for psychotherapists to focus on the client's actual needs and provide support based on the client's mental state.

key words: psychotherapeutic outcomes, solution-focused brief therapy, PAC analysis, problem perception, no-improvement case

問題と目的

本稿の目的は、心理療法においてクライアントが「改善しない」と感じた時の、問題に対するイメージについて検討することである。

心理療法を受けることで「よくなった」と感じる体験は一人一人異なる主観的な体験である。またその際には、心理的な問題は個人の世界への認識に関連するという Watzlawick (1978) の指摘から、個人の世界観やそれに基づく世界との関わり方などの、動的なプロセスも含まれることも考えられる。

これまでの心理療法に関する研究を概観すると、心理療法の成果に関するいわゆるアウトカム研究に

関しては量的な研究が主流であった。近年その流れが多様化し、質的な研究が見られるようになったものの、主として心理療法の内容に関するプロセス研究においてであり、アウトカム研究においては依然少ない (Orlinsky, Ronnestad, & Willutzky, 2004)。それは、Hill & Lambert (2004) が挙げるアウトカム研究の指標の重要な条件のうち「明確さ、再現可能性」を満たさないからである。

だが量的研究においては、先に述べた一人一人の異なる主観的な体験を本人の視点から明らかにすることは難しい。また、世界への関わり方といった動的なプロセスを表すことにも困難がある。研究者側の設定した選択肢の範囲内での測定しか行えないた

* 日本女子大学

Department of Psychology, Faculty of Integrated Arts and Social Sciences, Japan Women's University, 1-1-1 Nishi-Ikuta, Tama-ku, Kawasaki-shi, Kanagawa 214-8565, Japan

め、Bohart (2005) が指摘したように、セラピストの視点をより強く反映したものとなる可能性がある。クライアントの要因は心理療法の成果に大きく影響する (Lambert, Shapiro, & Bergin, 1986) ことを考えると、クライアントの視点を加えた複眼視による考察が必要だといえる。

そこで青木 (2007, 2008) は、質的で個性記述的な分析法である PAC 分析 (Personal Attitude Construction Analysis: 個人別態度構造分析; 内藤, 2002) を 3 回の試行面接の事前事後テストとして用いて、調査協力者 (以下、協力者) の問題に対するとらえ方がどのように変化するかを明らかにすることを試みてきた。その結果、青木 (2007) では「協力者の問題に対する評価が肯定的になること」「協力者の問題に対する姿勢が、より主体的に適応的になること」「問題に対するとらえ方が様々に変化すること」が見いだされ、青木 (2008) では「協力者とそれを取り巻く人々の個人内・個人間相互作用が変化すること」が示されている。

PAC 分析は、自由連想法とクラスター分析により、樹形図とその構造への解釈を行って個人の態度の構造を明らかにする。評価査定機能 (井上, 1998) を有するため、事前事後テスト的に用いることで、協力者の内的世界が開始時から終結時の 2 時点でどのように変化したかを比較することができる。本研究で PAC 分析を用いた理由は、「協力者が解釈に参加するので本人の視点を知らることができる」、「クラスター分析によって客観的な手法も交えて分析できる」、「協力者の気づけなかった点も明らかにできる」、「スクリプトを見ることで動的なプロセスを読み取れる」、などの特徴を備えているためである。

ところで青木 (2007, 2008) では協力者により何らかの改善が見られたと報告された事例のみが報告されているが、その中に 1 事例、協力者から「変化がない」と申し出があり、試行面接を途中で中断したケースがあった。通常の面接であれば、クライアントが不満を抱き中断したケースといえる。失敗から学ぶ機会は貴重である。このケースを協力者が改善したと感じた場合と比較することにより、何が起きているのか、何がその要因となりうるのかについて知りうる機会となり、PAC 分析により、協力者も実験者も気づけなかった側面について検討するこ

とが可能になる。そして、そのような場合にセラピストがどのように対応すべきかについての示唆を得ることができる。

そこで本研究では、試行面接において改善しなかったと報告された場合について、特徴的な側面を明らかにし (目的①)、セラピストがとりうる対応についての留意点を検討する (目的②)。その際、PAC 分析にはクライアントの内省を促す効果がある (井上, 1998) ため、その点も併せて考察することとする。

方 法

(1) 実施期間

2006 年 5 月～7 月

(2) 調査協力者

「心理療法によって問題の見方がどのように変化するかを明らかにする」という本研究の趣旨に賛同した、問題を抱えた健常者である。

(3) 手続き

①事前 PAC 分析: 扱いたい問題のイメージの PAC 分析

1) 当該テーマに関する自由連想: 協力者が面接で扱いたい問題を尋ね、連想刺激を作成した。口頭および文面でインストラクションとして呈示し、協力者に、そこから連想した言葉などをカード 1 枚につき 1 項目、自由に書いてもらう。PAC 分析では、連想刺激が非常に重要であるといわれている。そこで事前・事後では面接を行う前とそれについて話し合った後という相違があることに対応して、その指し示す内容が同一であるよう注意しながら、それぞれに連想刺激を作成した。その後、各項目を重要度の順番に並べてもらった。

2) 協力者による連想項目間の類似度評定: 1) で得られた連想項目を 2 つの対にして提示し、その 2 項目の類似度を「非常に近い」～「非常に遠い」の 7 段階で評定してもらい、類似度距離行列を作成した。

3) 類似度距離行列によるクラスター分析: 統計ソフトは、HALWIN を使用し、ワード法によるクラスター分析を行った。

4) 協力者によるクラスター構造の解釈やイメージの報告、項目の符号の説明: クラスターの命名やクラスター同士の関係、各項目のプラスマイナスイ

メージについて聴取する。価値の符号とは、協力者自身にとって、その項目がプラスのイメージ(+), マイナスのイメージ(-), どちらでもない(0), どちらでもある(±)のいずれにあたるか、である。±の使用は筆者の発案(内藤, 1998)であり, 「+, -, のどちらにもどうしても決められない時に±としてください」とインストラクションした。

5) 実験者による総合的解釈: 1)~4)を踏まえて総合的に解釈する。

1)~4)を一回のセッションで実施した。所要時間は、ほぼ40分~1時間の間であった。5)は、次の②の試行面接の内容も考慮し、実験者が一人で実施した。

②試行面接

事前PAC分析から1週間後、呈示された問題について、解決志向アプローチ(Berg & Miller, 1992; 以下SFA)を用いた時間制限面接を1週間間隔で3セッションを上限として行った。回数を3回までとしたのは、Lambert, Okiishi, Finch, & Johnson (1998)やTalmon (1990)より、3回で十分変化が起これと思われるためである。SFAを用いたのは、実験者がなじみ深く、また侵襲的でなく依存性を高めないため、短期間で終結させる面接にふさわしいと考えたからである。1セッション55分とし、45分の時点で一旦休憩し、5分の休憩をとり、その後5分のフィードバックを行った。

セッション回数は、事前に「最大3回までとし、途中で協力者からの申し出があったり、スケールが8以上になった場合、終了について検討する」と伝えておいた。解決に向けた改善の主観的判断を検討するため、定量的な指標としてスケール・クエスチョン(DeJong & Berg, 2008)を最終回面接の休憩後の振り返り時に用いることとした。面接開始時を1、解決を10とした。

③事後PAC分析

②の終了の1週間後、事後PAC分析を行った。手続きは①と同様である。

④倫理的配慮として、以下のことを事前PAC分析開始前に協力者に伝えた。

1) 情報の管理に関して: 「秘密を守ること」「個人情報については厳重に管理すること」「個人が特定されるような記述は一切行わないこと」「論文の作成にのみ使用すること」「データの使用中止し

てもらいたいときはいつでも申し出ていただきたいこと」

2) 実験への参加について: 「実験を途中で止めたくなったら申し出ていただきたいこと」「面接の影響により状況が悪くなるようなことがあったら伝えていただきたいこと」「そのほか、不満や疑問があったらいつでも表明していただきたいこと」

結 果

本稿では、2回目の試行面接後に「変化がない」と報告があったために話し合って面接を終了した1名Aさん(20代女性)を今回の分析の対象とする。

(1) 事前PAC分析(以下, Pre-PAC)

①当該テーマについての自由連想とクラスター分析

Aさんは扱いたいテーマについて「これからの研究のイメージを明確にし、将来について考えたい」と述べた。「これからの研究のことについて今現在抱いているイメージとか、それにまつわる周りの人との関係や、Aさんご自身がそれに対してなさっていることややってみようと思うことなど、イメージされることを、自由に書いてください」というインストラクションに対し、Aさんは、8個の連想項目を生成した(Figure 1)。

②Aさんによるクラスター構造の解釈やイメージの報告

クラスター1は、「研究とは何か特別なもの〜」「今はもっと〜遅くない」の2項目から構成され、Aさんはこのクラスターを〈今の自分にはできない〉と命名した。クラスター2は「日々の勤務にまつわる雑事〜」から「必要以上に苦労しなくても〜」の3項目からなり、Aさんはこれを〈今の日常への肯定〉と命名し『周りから求められることは果たし、それなりにやれている、自己肯定感』と説明した。クラスター3は「やらなくてもいい口実ばかり探してしまう」から「いつかできるかも」までの3項目で構成され、〈現実からの逃避〉と命名され、『よく考えると現状を脅かすものなので考えたくない』と説明された。

〈今の自分にはできない〉と〈今の日常への肯定〉の関係について尋ねるとAさんは『どちらも時間軸で、クラスター1は将来、2は現状。似ていない。離れている』と答えた。〈今の日常への肯定〉と〈現実からの逃避〉については『対照的でアンビバレン

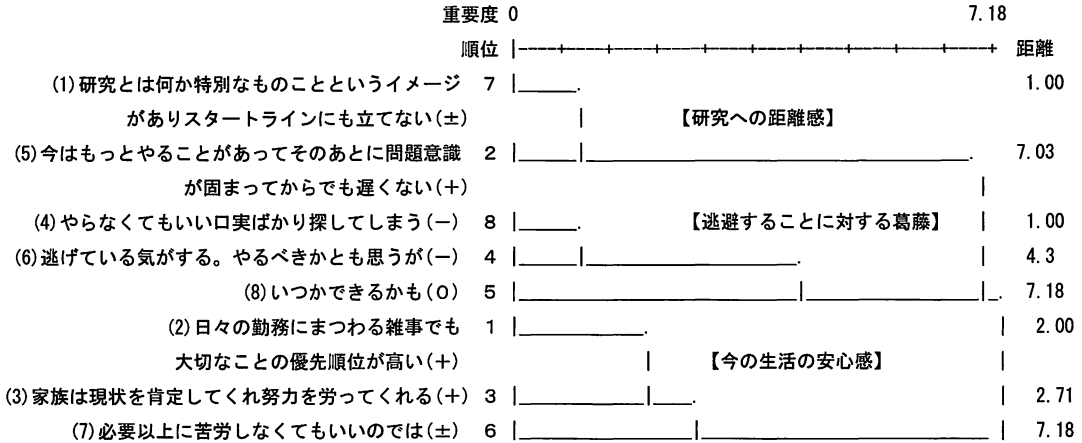


Figure 1 「研究のイメージ」についての事前 PAC 分析

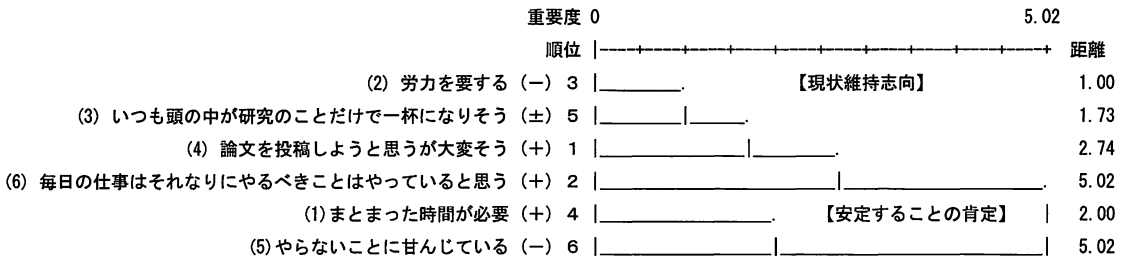


Figure 2 「研究のイメージ」についての事後 PAC 分析

ト、矛盾している』と述べた。〈今の自分にはできない〉と〈現実からの逃避〉については『意外と近い。いずれ逃げなくなるかもしれない』とのことだった。

③A さんによる項目のプラスマイナスイメージの報告とその理由

プラスマイナスイメージの個数は、+が3個、-が2個、0が1個、±が2個であった。その理由をたずねると A さんは、「研究とは何か特別なもの～」の±について、『特別だからできないし仕方ないけど、それを肯定していいものかという疑問もある』、「日々の勤務にまつわる雑事～」の+について『自分以外にはできないし、いやというわけではない』、「家族は～」の+について『時々揺らいでしまうので、家族のひとつで落ち着ける』、「必要以上に苦労しなくても～」の±について『苦労しなければいけない、でも辛いよね、とどっちもどっちなので』、「やらなくていい口実ばかり探してしまう」の-について『うしろめたいので』、そして「いつかできるかも」が0なのは『信じているわけでもない

し、消極的』と説明した。

(2) 試行面接

面接を2回行った後、A さんから『変わらないですね』と感想が語られ、Th と話し合った結果、面接を2回で終了することとなった。スケーリングクエスチョンに対しては具体的な数字は『生活はずっと安定しているので6のまま』答え、『最初と変わらない』と述べていた。

(3) 事後 PAC 分析 (以下、Post-PAC)

①当該テーマについての自由連想とクラスター分析 “今現在、研究について、周りの状況について思っていることのイメージを、書いてください” というインストラクションに対し、A さんは、6 個の連想項目を生成した (Figure 2)。

②A さんによるクラスター構造の解釈やイメージの報告

クラスター 1 は、「労力を要する」から「毎日の仕事はそれなりにやるべきことはやっていると」までの4項目から構成され、A さんはこのクラスターを〈これ以上は大変〉と命名し、『項目同士が似

ているとも思えなくて、バラバラ』と述べた。クラスター2は「まとまった時間が必要」と「やらないことに甘んじている」の2項目からなり、Aさんはこれを〈因果関係〉と命名した。

〈これ以上は大変〉と〈因果関係〉の関係について尋ねるとAさんは『似ていて、同じことを似通った言い方で表現している。あまり矛盾していないし、クラスターが分かれていない感じ』と答えた。

③Aさんによる項目のプラスマイナスイメージの報告とその理由

プラスマイナスイメージの個数は、+が3個、-が2個、0が0個、±が1個であった。その理由についてAさんは、「労力を要する」の-について『他のことがおそろかになる』、「いつも頭の中が～」の±について、『まい進する人は魅力的だが、自分がそうになったら生活が大変』、「論文を投稿～」の+について『前向きに鼓舞したい』、「まとまった時間が必要」の+について、『逃げる口実なので』と説明した。

④2つの樹形図を比べての感想

『後の方が表現が平易になっている。事前テストは掘り返して書いたが、今日は素直に書いた。割合シンプルに受け止めていて、私は私と思う。やるべき時が来たらやる。今やりたいことを、やりたいと思うようにやりたい』と感想を述べたことから、実生活においては目に見えた変化がないが、そのことに対する感じ方が変わったことが理解された。

考 察

(1) Pre-PACの総合的解釈

最初に生成したクラスター1では、研究を今の生活の文脈から離れた遠いものととらえている。それを〈今の自分にはできない〉と命名したことから、未来と対比して現在をとらえているといえよう。そこでクラスター1を【研究への距離感】と命名する。クラスター2はAさんによると〈現実からの逃避〉であるが、この中には、項目の内容からも、やらなくてもいい口実を探しながら、やるべきかと迷っている矛盾と悪循環が見て取れる。また、項目のプラスマイナスイメージがこのクラスターのみと0だけであることから、逃避すること自体をよしとしていない様子がわかる。そこでクラスター2を【逃避することに対する葛藤】と命名する。

クラスター3〈今の日常への肯定〉は、Aさんにとって安心できる現状を表しており、【今の生活の安心感】と命名する。『クラスター1とはとても遠い』といっていることから、『意外と近い』クラスター1, 2と異質な対比するイメージととらえており、肯定しきれない様子である。

また、【今の生活の安心感】が他の2つと大きく異なっているとAさんが感じていることから、今の状態を肯定したいがそれができないと感じていることが理解される。クラスター2と3の結節「必要以上に苦勞しなくてもいいのでは」の±は、『苦勞しなければと思うが、でもそれをつらい』という葛藤を表していると思われ、Aさんが抱えている葛藤の背後に『苦勞しなければ』という信念があることがうかがわれる。

【逃避することに対する葛藤】の「いつかできるかも」が【研究への距離感】へと結びついているイメージを、Aさんが語っており、これは『苦勞しなければ』と考えて葛藤し、これら2つのクラスターの間で、悪循環が起きている可能性を示唆している。このことは、「いつかできるかも」のプラスマイナスイメージが0であり、またAさん自身『信じているわけでもないし、消極的』と語っていることから、信じたいけれど信じきれないという気持ちや、『苦勞しなければ』という信念が後押しをしている可能性が考えられた。

まとめるとこのときのAさんは、研究に距離を置き、家庭と仕事を大切にしている現状を肯定し安心したいが、そういう自分が逃避しているように思えて肯定できず、葛藤している状態といえるだろう。

(2) Post-PACの総合的解釈

クラスター1では「労力を要する」ことはマイナスイメージであり、まい進しているように見える他者と自分を比較して「いつも頭の中が研究のことだけで一杯になりそう」、「論文を投稿しようと思うが大変そう」と考えている。ここには変化を起こすことへのためらいが表れており、【現状維持志向】と命名できるだろう。

これに対し、クラスター2では【現状維持志向】を受けて、研究のためには「まとまった時間が必要」であることを認め、「やらないことに甘んじている」という結論に至っている。Aさん自身が〈因果関

係)と述べているように、クラスター2内の2項目の関係は、直線的因果律による帰結であり悪循環ではない。それは「まとまった時間が必要」という現状をプラスにとらえたうえでのものであり、『苦勞しなければ』という信念が現状に合わないことを認め、とらわれなくなりつつある状態といえよう。そこから到達する「やらないことに甘んじている」という結論はマイナスイメージであり、どこか後ろめたさが残るのだが、自然にそこに落ち着いている様子がわかる。以上よりクラスター2は【安定することの肯定】と命名することができる。

そして「毎日の仕事は～それなりにやっている」と現状の肯定を表す項目が+で、両クラスターの結節になっている。それぞれのクラスター内にプラスの項目とマイナスの項目があり、それぞれに葛藤が見られるが、全体としてはあまり感じられなくなり、平穩になっている様子がうかがえる。また、【現状維持志向】の項目「論文を～」の重要度順位が1で評価が+である点からも、論文投稿をプラスに評価しており、心残りとなっていることを以前よりもはっきりと意識できるようになっている様子である。以上より、『苦勞しなければ』という信念から離れ、現状を肯定し、悪循環がなくなる一方で、小さい葛藤を抱えつつも、心残りを心残りとしてとらえているのが、このときのAさんの状態といえるだろう。

(3) Pre-PACとPost-PACの比較

以上を踏まえ、Pre-PACとPost-PACを比較し、問題の見方の変化を検討する。

①変化が見られない、あるいはあまり変わらない点

項目のプラスマイナスイメージは、+が3個、-が2個のままで、状況への評価には変化がない。他にPre-PACでは「勤務」に関わる項目が重要度順位1、Post-PACでは「仕事」に関わる項目が重要度順位2で、いずれもプラスイメージである点から、Aさんの生活の中で日々の仕事の優先順位が変わらず高いことがうかがえる。

②変化が見られた点

項目数が8から6に減少し、項目が全体的に短めになっていることや、Aさんの感想からも、変わらない状況をシンプルに受け止めている点が変わっているといえる。

唯一評価が0であった項目「いつかできるかも」

が消滅し、防衛的態度が和らいだ可能性が見受けられる。さらにPre-PACでは「やらなくていい口実～」がイメージで重要度順位が最下位の8であるが、口実に類似した項目がPost-PACの「まとまった時間が必要(だからできない、という理由)」で+イメージになり重要度順位も6項目中4に変化している。これらの点から、Pre-PACでは口実を持つことに対してもネガティブな印象を持っていたが、Post-PACでは口実への違和感が小さくなっている様子がみられる。

さらに、重要度順位1の項目を比較すると、Pre-PACでは優先順位に関する項目が重要度1であり、Aさん自身の対処法を工夫に焦点が当てられているのに対し、Post-PACでは「論文を投稿しようと思うが大変そう」と、研究自体が大変なことなのだという認識に焦点が当てられていることから、自分が努力しなければならないという考えから、できなくても仕方がないという認識へと変わってきている可能性がうかがえる。

次に、項目やクラスターの結びつきにおけるスクリプト(内藤, 2008)からみた個人内・個人間相互作用に着目する。Pre-PACでは、「今はできない(クラスター1)→現実から逃げたいが、でもそれはよくないし、いつかできるかもしれない(クラスター2)→今はできない(クラスター1)…」という悪循環が見られる。これに対しPost-PACでは、「労力を要することがたくさんイメージされる(クラスター1)→でもやるべきことはやっている(クラスター1)→時間も必要だがそれもないのでできない(クラスター2)」と結論しており、悪循環が見られなくなっていることがわかる。

また、Pre-PACで見られた「家族」に関する項目がPost-PACでは消えたことから、他者の支えが意識されなくなっており、自分自身のことととらえている様子が見える。個人間相互作用にも変化が見られたといえる。

最後にクラスター間・クラスター内の葛藤度について検討する。まずクラスター間の葛藤であるが、Pre-PACではクラスター1と3が+および土、クラスター2が-および0の項目で構成され、クラスターによってプラスマイナスイメージが分かれており、クラスター間に葛藤が見られたのに対し、Post-PACでは2つのクラスターそれぞれにプラスとマ

イナスの項目が見られており、クラスター間の葛藤がなくなっていることがわかる。

次にクラスター内の葛藤の指標について内藤(2008)は、「プラス項目の数+マイナス項目の数」の値を分子とし、「(プラス項目の数-マイナス項目の数)の絶対値に1を足したもの」の値を分母とする葛藤度を提唱している。本稿では葛藤を示すことがあるプラスマイナスを採用しているため、更にプラスマイナス項目の数をクラスター内の項目数で割った数値を加えることとする。するとPre-PACでは葛藤度がクラスター1から順に1, 2/3, 1となり、Post-PACでは7/4, 2となる。比較するとクラスター内の葛藤は、むしろPost-PACで増加しているといえるだろう。また、Post-PACでは2つのクラスター内の葛藤度がより接近していることもわかる。

これは、Aさんが『Pre-PACではクラスター同士が矛盾しているが、Post-PACでは同質』と語っていることや、クラスター間の距離がPost-PACで減少していることも矛盾しない。

総合考察

まず、本研究の目的①「本事例の特徴」について考察する。Pre-PACとPost-PACの比較よりわかることは、Aさんの生活が、仕事を大切にしているという点では変化していないこと、逆に変化した点として、Pre-PACでは研究から距離をとり仕事と家庭を大切にしている現状を肯定したいと思い、現実逃避を試みながらも、それはやはり良くないと感じて悪循環に陥ってしまっているが、Post-PACでは、研究の大変さを実感するとともに、できなくても仕方ないと考えて今の生活の文脈の中で安定していることが挙げられることである。『苦労しなければ』という信念の影響が和らぎ、自分を駆り立てる気持ちは和らいだが、研究を意義あるものと感じる気持ちはよりクリアになり、心残りを抱えた状態といえるだろう。そしてそれは、各クラスター内に葛藤が見られることも矛盾しない。これらの特徴は、改善が報告された事例(青木, 2007)におけるような、協力者が現状に向き合い受け入れ、問題に対して主体的に関わろうとしている様子とは異なっている。

これを踏まえて、目的②「考える対処」につい

て考察する。心残りや後ろめたさを感じながら、以前より気にならなくなったものの葛藤も抱えているAさんの状態を考えると、この状態に面接の中で対応することが有効だったのではないと思われる。

PAC分析の結果からは離れるが、Thの印象ではAさんは自分に厳しいところがあり、それゆえにこの試行面接に参加した経緯がある。それが目標をあきらめることを容易に許さず、同時に現在の生活に対しても手抜きをしたくない気持ちにつながっているようだった。こうした、心理面接において通常行われる「パーソナリティ傾向」の見立てを合わせて考えるならば、多くのものを自分できちんと行いたいAさんではあるが、その中で何を目標として面接を進めるべきかを明確にする必要があったように思われる。つまり、SFAの文脈でいえば、ゴールセッティングについての話し合いを十分に行うべきであった(Bertlino & O'Hanlon, 2002)点が1つ挙げられる。

また、複雑な思いを抱えていた様子がPre-およびPost-PACからうかがわれることから、これらの思いに関心を向けつつ、面接を行うことが有効であったと思われる。これもSFAで重視されてきたことであるが、「クライアントのペースに合わせること」の重要性(de Shazer, 1985)が改めて明示されたといえる。ただし、先述のようにAさん自身が自分に厳しいがゆえに、複雑な思いを抱えていること自体に違和感を感じる恐れがあったので、この点についても十分に配慮する必要があった(Wachtel, 1993)。そのためには時間も必要であったが、本稿で用いた時間制限のある面接という限界も影響していたと考えられる。

最後に、本研究の限界と課題点について述べる。試行面接の効果の測定のために事前事後でPAC分析を行い比較したが、井上(1998)も指摘するように、PAC分析にはそれ自体カウンセリングと同様に内省を促す効果がある。そのためPre-PACにおいて、自らの研究に対する態度をある程度理解したがゆえに、それに続く試行面接で変化が見られないと感じたのかもしれないし、またPre-PACで自らの態度を理解するのがAさん固有の変化のペースに対して速かったことが、試行面接で自ら急ぐような姿勢につながった可能性もある。そしてPost-PACには、Pre-PAC, 試行面接, Post-PACの影響

が混在している可能性がある。Aさんが「変化がない」と述べているにもかかわらずPost-PACとPre-PACとの間に見られた相違には、Post-PACによる影響が反映されているかもしれない。こうした限界を踏まえて結果を慎重に考察する必要がある。そのうえで言えることは、先述のように、改善が見られないと考えている場合には、クライアントの心の中に心残りや葛藤が抱えられている可能性があるということではないだろうか。

また、本事例は改善が報告されなかった事例のひとつであり、今後さらに多くの事例において検討を重ねていくことも課題といえよう。

謝 辞

貴重なデータと学びの機会を提供して下さったAさんに感謝し、御礼申し上げます。

引用文献

- 青木みのり 2007 心理療法における問題の見方の変化に関する検討：PAC分析を用いた質的研究。ブリーフサイコセラピー研究, 16(2), 95-108.
- 青木みのり 2008 心理療法の成果に関するPAC分析を用いた事例検討—個人内相互作用と個人間相互作用の変化に着目して— お茶の水女子大学人間文化創成論叢, 10, 217-227.
- Bertolino, B., & O'Hanlon, B. 2002 *Collaborative, Competency-based Counseling and Therapy*. Allyn & Bacon: Boston.
- Berg, I. K., & Miller, S. D. 1992 *Working with the Problem Drinker: A Solution-Focused Approach*. New York: Norton. (バーグ, I. K., & ミラー, S. D. 斉藤 学監訳 1995 飲酒問題とその解決ソリューション・フォーカスト・アプローチ 金剛出版)
- Bohart, A. C. 2005 The Active Client. In Norcross, J. C., Beutler, L. E., & Levant R. F. (Eds.), *Evidence-Based Practices in Mental Health: Debate and Dialogue on the Fundamental Questions*. Washington: APA, pp. 218-225.
- DeJong, P., & Berg, I. K. 2007 *Interviewing for Solutions* (3rd ed.). Pacific Grove, CA: Brooks/Cole. (ディヤング, P., & バーク, I. K. 桐田弘江他訳 2008 解決のための面接技法〈第三版〉金剛出版)
- de Shazer, S. 1985 *Keys of Solution in Brief Therapy*. New York: Norton. (ドゥ・シェイザー, S. 小野直
- 宏訳 1993 短期療法解決の鍵 誠信書房)
- Hill, C. E., & Lambert, M. J. (2004) Methodological Issues in Studying Psychotherapy Process and Outcome. In Lambert, M. J. (Ed.), *Bergin and Garfield's Handbook of Psychotherapy and Behavior Change* (5th ed.). New York: Wiley, pp. 84-135.
- 井上孝代 1998 カウンセリングにおけるPAC(個人別態度構造)分析の効果 心理学研究, 69, 295-303.
- Lambert, M. J., Shapiro, D. A., & Bergin, A. E. 1986 The effectiveness of psychotherapy. In Garfield, S. L., & Bergin, A. E. (Eds.), *Handbook of psychotherapy and behavior change* (3rd ed.). New York: Wiley, pp. 157-212.
- Lambert, M. J., Okiishi, J. C., Finch, A. E., & Johnson, L. D. 1998 Outcome Assessment: From Conceptualization to Implementation. *Professional Psychology: Research and Practice*, 29, 63-70.
- 内藤哲雄 1998 私信.
- 内藤哲雄 2002 PAC分析実施法入門改訂版 ナカニシヤ出版.
- 内藤哲雄 2008 PAC分析を効果的に利用するために内藤哲雄・井上孝代・伊藤武彦・岸 太一(編) PAC分析研究・実践集I ナカニシヤ出版, pp. 1-33.
- Orlinsky, D. E., Ronnestad, M. H., & Willutzki, U. 2004 Fifty Years of Psychotherapy Process-Outcome Research: Continuity and Change. In Lambert, M. J. (Ed.), *Bergin and Garfield's Handbook of Psychotherapy and Behavior Change* (5th ed.). New York: Wiley, pp. 307-389.
- Talmon, M. 1990 *Single Session Therapy*. San Francisco: Jossey-Bass. (タルモン, M. 青木安輝訳 2001 シングル・セッション・セラピー 金剛出版)
- Wachtel, P. L. 1993 *Therapeutic Communication—Knowing What to Say When*. New York: Guilford Press. (ワクテル, P. L. 杉原保史訳 2004 心理療法家の言葉の技術—治療的なコミュニケーションをひらく 金剛出版)
- Watzlawick, P. 1978 *The Language of Change—Elements of Therapeutic Communication*. New York: Norton. (ワツラウィック, P. 築島謙三訳 1989 変化の言語—治療的コミュニケーションの原理 法政大学出版局)

(受稿：2010.5.11, 受理：2011.6.10)